美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

7

2016 July/August

TAKE FREE

NO.36

特集

よぐきた とびしま

庄内憧憬

有働由美子

NHKアナウンサー

Cradle 7 美しくなつかしい、日本をのせて。［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2016 July/August

平成28年7月1日発行（偶月奇数月発行）第6巻6号（通巻36号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市京田2-59-3（コマツコーポレーション）電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／由良 白岩大神

青い海に身を委ねる　夏の由良

荘内銀行

特集 よぐきたとびしま

山があり、海があり、そして、島がある。
酒田沖に浮かぶ離島「飛島」では、
新たな価値観での未来づくりが始まっています。
日本海の孤島から、私たちみんなの島へ。
島はいつでも待っています。
「飛島さ、よぐ来たの」

今年5月28日に行われた「飛島クリーンアップ作戦」の閉会式後、特集にご協力いただいた呉尚浩さん、岸本誠司さん、合同会社とびしまの皆さんに加え、酒田市役所とびしま総合センターの皆さん、金子博さんをはじめとするNPO法人パートナーシップオフィスの皆さん、県森林整備課の梅津勘一さん、東北公益文科大学の学生スタッフの皆さんと。また、今年9月には全国の学生200人が飛島や鶴岡、遊佐町の海岸でクリーンアップ作戦を展開する「いぐべ、飛島」が開催される予定です。

呉尚浩さんとともに、飛島で活動を続けている教員の伊藤眞知子さん、澤邉みさ子さん、中原浩子さん、岸本誠司さん、小関久恵さん。平成26年、公益大の学部・大学院生と一緒に飛島の芝生公園にて。

とびしまの15年

平成13年の開学以来、飛島を実践的な教育・研究テーマに
フィールドワークを重ねてきた東北公益文科大学。
飛島クリーンアップ作戦への参画、「飛島ふぁんくらぶ」の結成、
飛島音頭&小唄の復活、とび魚だしプロジェクト、防災への取り組み…。
その歩みはまさに飛島15年の歩みといえそうです。

特集 よくきたとびしま

東北公益文科大学
「観光・まちづくりコース」教授
呉 尚浩さん

横浜市生まれ、名古屋市育ち。平成13年の開学時に庄内へ。公益学や環境学の視点から自然の循環的利用・保全と地域づくりを研究。庄内では飛島の島づくりと漂着ごみ問題、海岸林保全などをテーマに研究と実践活動を行っている。「とびしま未来協議会」事務局長。

澄み渡った空が広がる5月28日、飛島に240人ほどの人々が集まって「第16回飛島クリーンアップ作戦」が実施されました。飛島に流れついた漂着ごみを拾うこの活動は平成13年に始まり、毎年5月末に行われています。

酒田市にある東北公益文科大学も同じ年に開学しました。同大学がこの活動に参画するようになったのは、その夏、呉尚浩さんが学生を連れて飛島に行ったことがきっかけでした。「飛島に行って最初に出会ったのが自然の美しさでした。同時に出会ったのが漂着ごみに埋め尽くされた海岸です。この時、学生たちの中から〝飛島の海岸をきれいにする活動をしたい〟という声が上がりました。本学は公益について学ぶ大学です。公益を達成するには心が動き、方法論を学び、行動するという3つのバランスが大切です。それを現場で学ばせてもらうという意味も含めて、翌年に立ち上がった実行委員会に参加しました」と呉さん。

島民と応援団との共創の島づくりに向けて必要なことを順番に。

呉尚浩さんと呉ゼミの4年生たち。
前列右から横沢有紗さん、呉尚浩さん、高萩遥さん、齊藤春菜さん。後列右から遠藤翔さん、鈴木瞭太さん、梅津直樹さん。

15年にわたる活動を経て現在は、公益大の卒業生2名が飛島に住みながら島づくりに励んでいます。また今年度、呉さんは「離島の島づくりの実践と研究にさらに力を注ぎたい」と、教員5名を中心に「とびしま未来研究所」を立ち上げました。

また この時、呉さんたちは島の高齢化も目の当たりにしました。最盛期1700人を超えていた人口は現在216人と過疎化も進んでいます。島を元気にしようと島のガイドや飛島音頭の復活などの魅力発信活動を始めました。

しかし数年後、さまざまな応援団の活動が島民の主体的な活動に結びつかない現状をみて、呉さんたちは根本的な原因を探り始めます。そんな中、平成19年の離島振興計画推進調査で見えてきたのが「島の中での合意形成の場づくりの必要性」でした。「例えば、新潟県粟島は一つの村なので村長もいれば議会もあって、自分たちで島を動かすことができます。でも飛島は昭和25年に酒田市に編入して以来、自分の島に対する島の人たちの決定権が弱い状況が長く続きました。そのため一人一人に思いとアイディアはあっても、その意見をまとめて新たなことに取り組むことに難しさがあったんです」。

平成20年、島民たちが気軽に話し合える井戸端会議的な場を目指して、島内に学生が「しまの家」を開設。22年にはNPOパートナーシップオフィスが引き継ぎ、24年に「しまcafé」を開店しました。

23年には、島の未来を話し合い、実行するための公的な場として、島民、公益大、NPO、行政などで「とびしま未来協議会」を発足。25年の離島振興計画策定に先立って協議会案をまとめました。「この計画を作ったことが、島民と応援団の共創の島づくりの第一歩だと思っています。もう一つ島づくりにとって大きなことは、トビシマカンゾウ保全をきっかけに、平成19年から始まった飛島、粟島、佐渡島の三島交流会です。島同士で自然を守り活かした島づくりを学び、刺激し合うことで、飛島にも島づくりに積極的な空気が生まれてきたことを感じています」。

ここ数年、公益大が島民と共創して取り組んでいるのは、島の地区防災計画づくりです。目標は一軒一軒の避難カルテを作成すること。「島のすべての人の命を守る仕組みづくり」に向けて、観光客向けの避難マップなども作成する予定です。「まずは島にとって必要なことを順番に。その中で島の人たちが島の未来に対する夢を語り、実現する仕組みづくりがさらに進めばと願っています」。

特集 よくきたとびしま

「海の民にとって、島と山は大切な目印」
ジオパーク認定に向けての動きが活発化する
飛島と鳥海山。その二つのシンボルには
大地と人との物語が色濃く刻まれています。

とびしまジオストーリー

飛島の西沖に見える御積島（右）と烏帽子群島（左）はどちらも火山岩でできた島。御積島には龍神がすむとされ、北側の洞窟内部は龍鱗の岩壁が見られる。飛島の明神社、遠賀美（おがみ）神社の御神体で、漁民（もしくは島民）や北前船の船乗りたちの信仰を集めてきた。

「鳥海山の頂上が吹き飛んで島ができた」そんな一説もある飛島。頂上は頂上でも、北海道の奥尻島まで続く〝海底山脈の頂上〟が、実際の姿。そうした「ジオ（地球、大地）」＝島の形成と、自然の生態系や人の生活との関わりを語る「ジオストーリー」を、民俗学研究者の岸本誠司さんの案内のもとで、たどってみました。

飛島の起源は、一千万年以上前、海底で火山活動が起こり、その噴出物が土台となりました。西海岸から飛島の形を見ると階段のようになっていますが、これは、島が波に浸食されながら隆起を繰り返してできた「海岸段丘」です。ほかにも、何千回もの海底火山の噴火の跡を刻む地層、地上にむき出しになった断層、波や風で削られてできた奇岩、溶岩が冷え固まってできた小島などが点在し、現在の島の形から、過去の変化を読み取ることができます。「飛島には、何種類もの火山岩が見られます。特に、黒っぽい色をした玄武岩は、日本列島ができたころの手がかりにもなるといわれているんです」。

一方、自然もまた個性的です。島は対馬暖流の真っ只中にあり、北緯39度にあっても温かく、北と南の動植物が混生しています。「島では昭和40年あたりまで、山から燃料を得ていました。それまで千人前後の人が、生活のために台地上の森を利用していた。いわば全島が里山だったんです」。島の水源を涵養（かんよう）するタブノキと、防風の役割をするクロマツがあり、人々は山の上にも畑を耕し、食材や燃料を得て、島の自然は成り立っていました。しかし、生活様式が変わり、人口が減るにつれて、人と森との関係は薄れ、森の様相も変化してきました。「地形、生物、文化、すべての『多様性』があるのが飛島です。特に自然の多様性は、島民の生活やなりわいとの関わりの中で維持されていたものといえます」。

現在、岸本さんは、島の漁村文化を継承していく活動にも力を入れています。「日本は海に囲まれた島国で、独自の海に対する考え方や、暮らしの知恵や技術がたくさんあったはずです。それがどんどんなくなって、伝える人も減ってきています。海の民の文化を、今の社会の中で維持していくことがこれからの課題です」。最近は、島のお父さんたちから「ジオパークって何だ？」と聞かれることも多いとか。岸本さんの答えは「島のことを一緒に考えてくれる仲間が増えるということです」。島の守るべきものの価値に多くの人が共感し、その共感を糧に、一緒に将来を考えていく。そんな未来づくりが今、進められています。

見て、触れて、知って
伝えたくなる面白さ。
体感する飛島のジオ（大地）。

鳥海山・飛島ジオパーク構想
推進協議会
専任研究員
岸本 誠司さん

兵庫県出身。平成17年、東北芸術工科大学東北文化研究センターに赴任後、飛島へ初渡島。その後、とびしま未来協議会のメンバーとなり、とびしま漁村文化研究会の代表も務める。1年間飛島に居住するなど、民俗学の視点で飛島の文化継承活動を続け、平成27年より現職。ジオパーク加盟認定に向けた活動を進めている。

写真提供＝岸本誠司

宮谷のタブ林

1

ゴトロ浜

3

烏帽子群島

2

1.太陽を取り合うようにして伸びる枝が、空に不思議な模様を描く。島の第一水源を守ってきたタブの森。2.安山岩の島。マグマが冷えて固まり、六角形の柱のようになった「柱状節理」という岩面が見られる。3.波の浸食でできた海食崖。海底火山から噴出した溶岩の破片や火山灰の地層。

しまびとカンパニー

過疎化が進む飛島に近年、移住者が増えてきました。
そんな中で生まれたのが「合同会社とびしま」です。
社員は20代～30代の“しまびと”7名。
島の未来を見つめながら、島に新しい活力を与えています。

特集 よくばりたとびしま

写真提供＝合同会社とびしま

代表社員
本間 当さん

昭和56年、飛島生まれ。実家は島内の旅館おばこ。東日本大震災を契機に平成24年、仙台市から飛島にUターン。翌年3月に合同会社を設立し、現在は「しまかへ」の姉妹店で、酒田市中町にある「炭かへ」を主に担当している。

島の歴史や文化を保存する活動から水産業のお手伝い、土産品の開発とWEB販売、カフェの運営、島の案内まで、飛島にわずか7名のスタッフで驚くほど幅広い業務を行っている会社があります。その名も「合同会社とびしま」。代表社員の本間当（あたる）さんは話します。

「設立のきっかけは、役員をしている自分、渡部陽子、松本友哉、小川ひかりの4名全員が、平成24年に飛島に移住したことです」。

おりしもその前年は「とびしま未来協議会」が発足し、島に今までになく大きな風が吹き始めた頃でした。すると翌年その風に引き寄せられるかのように渡部さんが「しまcafé」（現しまかへ）の店長として、松本さんが緑のふるさと協力隊として、小川さんが介護事業所スタッフとして島に移住。そこにUターンした本間さんも加わって、「せっかく同世代の若者が島にいるんだからご飯でも食べようと集まるようになって、次第に皆で一緒に何かしようかという話になりました。そして会社の理念が定まった翌年の春に、合同会社とびしまを立ち上げたんです」。

小さな島で、大きな夢を持ったしまびとたちの会社。

会社の理念とは、0次産業である島の風景の保存と継承を基盤に、1次産業の水産業や農業、2次産業の加工業、3次産業の流通・販売に取り組んで、6次産業化を目指すというもの。平成25年3月13日の設立以降、本間さんたちは理念に沿って「しまかへ」の運営や資料館の開設といった事業を展開しながら、島の中に若者が働く場を創り出してきました。中には島の除雪作業や草刈り、例大祭の楽器演奏や舞手といった活動も。

「島の人たちが従事してきたこうした仕事の請け負いは、島の人と仲良くなれる大事な活動なので全員で取り組んでいます。ただその分やることがありすぎて（笑）」。

今年5月2日に開催された「しまかへ」の口開け祭。集まった島民や観光客に向けて、屋根から300個のお餅をまきました。

合同会社とびしま

理念
島民 ＝ 社員
住む ＝ 働く

- 3次産業：流通・販売
- 2次産業：加工
- 1次産業：生産（農業・漁業）
- 0次産業：風景の保存・継承

［広報部］三浦 由人さん　遊佐町生まれのIターン
［研究部］増田 綾奈さん　栃木県宇都宮市生まれのIターン
［事業部］柳澤 春菜さん　東京都国分寺市生まれのIターン
［制作部］松本 友哉さん　山口県美祢市生まれのIターン
［広報部］渡部 陽子さん　飛島生まれのUターン
［研究部］小川 ひかりさん　東根市生まれのIターン
［代表社員］本間 当さん　飛島生まれのUターン

昨年は柳澤春菜さんが、今年は増田綾奈さんと三浦由人（なおと）さんが仲間に加わり、合同会社とびしまはパワーアップしました。島の人たちの理解と支援の輪も徐々に広がっています。「最初の頃は、島の人に島の未来のことを質問すると、『もう終わる島だから何もしなくていい』と言われたこともありましたからね。確かに今後、島に爆発的に人が増えるということはないでしょう。でも自分たちの役割は島の魅力に気づく人を増やして、少しでも長く島の風景や文化を存続させること。その手助けができればと考えています」。

設立から4年目となる今年は新たな商品開発を重点目標としているそう。小さな島で大きな夢を抱く〝しまびと〟たちに会いに、この夏、飛島に出かけてみませんか。

小川さんはとびしまコンシェルジュ兼「島のミューゼアム澗」館長。／渡部さんは東北公益文科大学・呉ゼミの卒業生で「しまかへ」店長。／松本さんは緑のふるさと協力隊として飛島へ。デザイン全般を担当。／柳澤さんは元・尾花沢市の緑のふるさと協力隊員。「島の駅とびしま」担当。／増田さんは新米とびしまコンシェルジュ。／三浦さんは栄養士免許を活かして「しまかへ」を担当。

とびしま コンシェルジュ

飛島の見どころから、ほんの一部をご紹介します

飛島には箱モノの観光施設なんてありません。
でも、たくさんの不思議と発見に満ちていて
島全体がまるでテーマパークのようです。
ご案内は、コンシェルジュ（接客係）におまかせを。

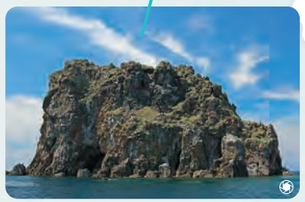
1 荒崎

荒崎では「トビシマカンゾウ」などの花々の群落が出迎えてくれる。

2 渚の鐘から

眺望スポット「渚の鐘」から西海岸を一望。

3 御積島



流紋岩でできた島。ウミネコの繁殖地として国の天然記念物に指定。

朝焼けの飛島から、39キロ離れた鳥海山の眺め。

4 巨木の森

幹回り3mを超えるタブノキとマツが混生する森。

5 鼻戸崎展望台から

鼻戸崎展望台から見下ろす、青い海に浮かぶ寺島。

6 賽の河原

丸石の山積みがある伝説の場所。ここの石は持ち帰ってはならないと伝えられている。

7 マンモス岩

約900万年前の火山岩が連なる海岸遊歩道には、マンモスの横顔のような岩も。

宮谷沢のタブノキの林には、かつて1000人の生活を支えた水源が今も残る。

8 遠賀美神社

御積島の拝殿。北前船の船乗りたちが航海安全を願った。この飾りはイカの模様。

ちいさな島の中に多くの物語がある。思い出に残る飛島の旅。

飛島は、島そのものが自然科学の博物館のようだったり、海と森には、暖帯と寒帯の生き物が入り混じった生物図鑑のようだったり、海と人の生活文化が受け継がれていたりと、一所に多様な自然と文化が凝縮されています。もちろん、愛好家にはよく知られているように、釣りやバードウォッチングの好適地でもあり、鳥海国定公園の一部にも指定されているとおり、その環境に身を置いて、発見を楽しむのが、飛島を旅する醍醐味。その道案内をしてくれるのが「とびしまコンシェルジュ」を務める、合同会社とびしまの小川ひかりさんと松本友哉さんです。「飛島は歩いて回れるぐらいの大きさなのがいいところ。島に暮らしている目線を大切にして、皆さんを案内しています」。島の周囲10・2キロ、南北に走る道路は4キロ。コンパクトな中に見どころが点在しているため、とびしまコンシェルジュは、お客さんの要望を聞いた上で、コースを設定しています。「花や野鳥を楽しみたい」「サイクリングをしながら絶景スポットを回りたい」「森を歩きながら巨木巡りをしたい」「伝説の残る場所を訪ねたい」など島の歩き方はさまざま。飛島は初めてという人でも、時間や人数などに応じた内容でおまかせすることができます。

「信号もないし、コンビニも娯楽施設もないし、ほしいものがすぐ買えるわけでもない。何もないけど、何でもあるんです」と小川さん。なければないで不便はなく、知ろうとすれば多くの発見があり、あるもので十分に満ち足りている。そんな飛島の空気に触れたらきっと、何度も訪れたくなるはずです。

島のなんでも案内人
とびしまコンシェルジュ料金表

（1人あたりの料金）

人数＼時間	90分	180分	300分
1人	2,000円	―	―
2～5人	1,200円	2,000円	―
6～9人	1,000円	1,800円	2,600円
10人	別途見積	別途見積	別途見積

・未就学児は無料
・300分コースまたは10人以上の場合は前日まで要予約

《お申し込み・お問い合わせ》
合同会社とびしま 小川ひかり
☎090-2025-2495 ✉ogawa@tobi-shima.com

写真提供＝合同会社とびしま ◎岸本誠司

飛島の食と文化を発信する3つの新スポットとお土産品いろいろ

島の駅とびしま

島の夫婦が営む食堂の閉店を受けて、合同会社とびしまが平成27年6月にオープンした飲食店&土産販売店&観光案内所。定期船の発着所前「とびしまマリンプラザ」の2階にあり、4月29日から9月末までの期間営業です。

店内4つのテーブル席で楽しめる食事は、メンバーが考案したオリジナルメニュー2品。昨年からのヒット商品「飛魚だしの冷やし茶漬け」、は、飛魚だしで炊いたご飯に冷たい飛島つゆをかけ、島の岩のりやカニをトッピングした飛島愛あふれる逸品です。「飛魚だし冷やし中華」も同じく島の飛魚だしを使った、味わい深い夏の味覚。来島の折にはぜひお試しを。

店内の一角には島のおいしいものを揃えた販売スペースもあります。合同会社とびしまが商品開発した「飛島アイス」や島民たちと手掛ける焼き干しなど、商品は島の駅とびしまのWEBSHOPでも絶賛販売中！

特製冷やし茶漬けのトッピングはなんと飛魚だしの氷も。新登場の冷やし中華も含め、島の飛魚だしを存分に生かしたメニューです。

9

特集 よくばりたとびしま

お土産あるよ

飛島や

「幻の天保そば」と「とび魚だしそばつゆ」の詰め合わせ。
◎[天保そば2束・とび魚そばつゆ1本セット]1,500円(税込)

イカの塩辛(魚醤仕込み)

イカの肝を塩漬けした魚醤に、イカの身を漬け込んだ島独自の塩辛です。
◎[1本200g]1,200円(税込)

飛魚の焼き干し

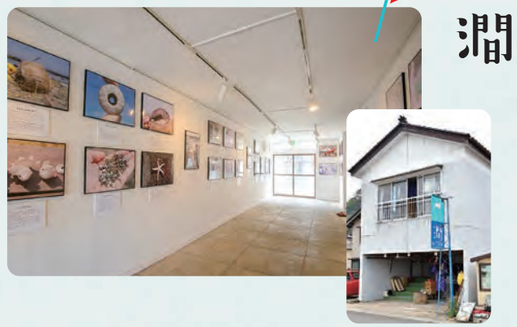
飛魚を手間暇かけて炭火焼き、天日干しした焼き干しです。
◎[3尾]980円(税込)

とび魚だしめんつゆ贅沢ストレート

とび魚の焼き干しを贅沢に使用し、海洋深層水でだしを取ったストレートつゆです。公益大「とび魚だしプロジェクト」が商品開発に関わりました。
◎[1本270ml]400円(税込)

島のミュージアム 潤(にま)

地域資料館



民宿だった空き家を合同会社とびしまがリノベーションし、平成25年11月に開館した地域資料館です。

自然の岩場を利用した船着き場「潤(にま)」を名称にした背景には、島の歴史文化をもとに、多様な人やものが集まって交流する場になってほしいとの思いがあるそう。また、合同会社とびしまが大切にしている0次産業「島の風景の保存・継承」の拠点として、島について学ぶ場ともなっています。

1階のギャラリーは飛島に関する写真を常設展示しているため、いつでも誰でも入館できます。要望があれば飛島に関する映像の上映も可。青い看板が目印です。

10

ごごいもまる

飛島特産ごごいも(じゃがいも)のおまんじゅう。ほろりとした甘さとホクホクの食感がやみつきに。
◎[5個]600円(税込)

かすべ(乾燥)

寒ざらしにしたかすべ(えい)は旨みが凝縮。水で戻して煮付けに。
◎[150g]840円(税込)

天然あらめ(乾燥)

春に数回しか採らない貴重な海藻。じっくり煮れば独特の舌触りに。
◎[100g]960円(税込)

飛島アイス

飛島限定アイスは、とびうお焼き干しだしアイス、ごごいもアイス、わかめヨーグルトアイス、焼のり抹茶アイス、魚醤アイスの計5種類。
◎[5個セット]1,750円(税込)

天然岩のり

冬に島の岩場で摘んだ岩のりは、少量でも磯の香りが抜群です。
◎[1枚]1,200円(税込)

※品切れ商品もあるため、詳しくはHP「島の駅とびしまWEBSHOP」でご確認ください。

11

カフェスペース しまか人

平成24年7月に「しまcafé」としてオープンし、合同会社とびしまが運営を担う屋外カフェ。目の前に広がる港と海を眺めながら、コーヒーやジュース、ビール、ワインなどを片手に、ランチや一品料理などが楽しめます。

詳しくは本誌40・41ページの「味なおもてなし」へ。

商品写真提供＝合同会社とびしま

井上農場の井上トマト 夏ver.

赤いシャーベットに赤いジャム
そしてまるくて赤いドライフルーツ
これはなんと井上農場のトマトで作った
井上トマト100%のかき氷

真っ赤に実ったトマトが丸ごと入った「井上トマトそのまんま」。それを袋ごと冷凍庫で凍らせて、もみほぐして器へ。そこに「井上トマトジャム」をたっぷりのせて、ドライトマトをトッピングすれば、なんとも贅沢なかき氷の完成だ。

トマトも単なるトマトではない。「食べた人が幸せを感じるお米をお届けしたい」と減農薬のお米づくりに長年取り組んできた鶴岡市渡前の井上農場が、そのノウハウを活かし、最大限農薬を使わずに漢方やハーブ、はちみつ、海藻エキスなどで育てているトマトである。しかも枝で完熟させてから収獲するため、甘みとうまみが格別だ。そんな井上農場こだわりのトマトを、収獲後すぐに加工したのが「井上トマト」シリーズである。

もともと同農場がトマトの加工品開発を始めたのは十数年前。「割れてしまって出荷できないけれど、おいしさは抜群」なトマトを何とかできないかと、市内の菓子店とジャムを作ったのが最初だった。さらに、シーズン以外も生のトマトを味わってもらいたいとレトルト業者と開発したのが「井上トマトそのまんま」。もぎたてを湯むきしてそのまま真空パックにするため、冷やして食べたり、オイルや酢を加えてドレッシングにしたりと、さまざまな形でいつでもトマトを楽しめる。

そんな数ある食べ方の中でもこの夏一番のオススメが、このかき氷である。フレッシュな甘みとシャリシャリ食感の中玉トマトのシャーベットに、ジャムの濃厚な甘みと風味がアクセントとなって、さわやかに口溶けしていく。これは、夏の暑さを吹き飛ばすシアワセの特効薬かもしれない。

「井上トマトそのまんま」は品種に合わせ、中玉、大玉、シシリアンルージュの3種類。「井上トマトジャム」はトマトとグラニュー糖とレモン果汁のみでシンプルに。ドライフーズはトマトと小松菜の2種類です。また自慢の特別栽培米「つや姫」を使ったポン菓子「つやポンDEチョコポン」（期間限定11月～4月）や「つや姫糀王子のあま酒」も発売中。主婦の店 鶴岡店や庄内観光物産館などで販売しています。

井上農場　080-8216-7329（直通携帯）

庄内俳句紀行

万緑の底にある月の沢龍神街道を歩く

日に日に山肌の緑が濃くなり
それに合わせるかのように
咲く花も変わる緑と水の回廊。
立谷沢川に沿って続く
月の沢龍神街道を歩いた。

立谷沢川と月山

季語 万緑（ばんりょく）
見渡す限り緑であること。夏の季語。

月山を水源とする立谷沢川は、出羽の山あいをたどり、豊富な湧き水を集めながら、最上川へと合流する。その水の色は日によって異なり、両岸の草木の緑は、この時期みるみる色を濃くしてゆく。立谷沢川流域は、山岳信仰や最上川舟運の歴史に息づく、水と緑の里である。

船渡場の跡形もなく行々子

―高橋花月

国道47号沿い、最上川舟運で賑わった清川から立谷沢川の上流へと遡るように向かって折れ、「月の沢龍神街道」を進むと、まだ雪渓の残る月山の雄大な姿が現れ、下流には鳥海山の美しい稜線を望む。「月の沢」とは、月山から流れる清流の様子や風景を表し、また、かつて立谷沢川流域では氾濫などでよく洪水が起きたことから、水を司る「龍神」への信仰が盛んになったことが、街道の名の由来という。

青梅雨の宙にただよふ朴の花

―草間時彦

立谷沢川流域は、江戸時代まで出羽三山詣りの表参道として賑わっていたが、今は静かに佇む里山で、どこか懐かしく迎え入れてくれる。川沿いの南部山村広場の木漏れ日や、せせらぎの声に癒やされる。清冽な流れの美しさに思わず膝を折り、水を掬う。穏やかな流れの上流から滝音が聞こえた。六淵ダムは昭和27年に建てられた砂防ダム。流れ落ちる水量と、その音に圧倒される。

虹と渓谷

滝という音の切り口ありにけり

―水内慶太

六淵ダムの上流へさらに進むと、川の両岸には谷空木が咲き、その先に峡谷が現れる。色濃い山躑躅が目に留まる。突然、壮大な砂防ダムの滝が現れ、その水嵩と滝の轟音に驚く。目の前には月山が迫り、その聖域に踏み入った気配がした。

万緑や人の生活は水に沿ひ

―あべ小萩

滝の上に立つと、万緑の底を翡翠色の川面が走り、滝壷へ落ちる水しぶきが七彩の虹をつくる。秋にはまた違った魅力を見せてくれるのだろう。水の調べと山並みの美しさに身をゆだねると、清閑な里の変わらない時間の流れが、どこまでも優しく包み込んでくれた。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）

南部山村広場のせせらぎ

六淵ダム

谷空木